

「新聞への意見投稿」 平成28年度掲載文の紹介

本校では、国語の発展的な学習として文章をまとめる力を育成することや若者の意見発表のよい機会として、新聞の投書欄への投稿を勧めています。今年度も、行事や学校生活への思い、日頃感じていることなどを投稿し、平成28年度には延べ30編の生徒の意見文が新聞各紙に掲載されました。

自分自身の考えを明確にして発信することは、自ら考え、判断し、行動する力の基盤となります。短い文章の中に、物事を正しくとらえた上で、感じたことや意見を表すことは、大人でもなかなか大変なことですが、掲載された文は、これらのことをしっかりと自分自身の言葉で表しています。ぜひ皆様もご一読いただければ幸いです。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年5月9日（月）掲載

私の世界を広げた時間 1年女子

「よろしくね」。いろいろな場所からそんな声が聞こえてくる。この声は、入学式を終えたこれからの仲間が新しい一歩を踏み出している証だった。でも私はその一歩をなかなか踏み出せなかった。そんな私の背中を押してくれたのが、「話し合い」の時間だった。

あることについて話し合うというテーマが出た時、正直「最悪だ」と思った。周りは話したことがない人ばかりだし、いきなり話せと言われても自分から話すことができないからだ。でも実際は最初に話題を振ってくれた子がいて、それを支えてくれた子がいて、とても話しやすかった。その時、私はあることに気が付いた。コミュニケーションをとることは人が生きていく上で一番大切で、人の重要な宝物であることに。

この経験があったから今の私がいると思う。やっぱり人と人は言葉がないと通じ合えない。その通じ合う一声をかけることが、つながりや世界を広げるための「カギ」になると改めて実感することができた。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成28年5月16日（月）掲載

すぐに緊張解けた中学校生活 1年男子

「とうとうこの日が来た」。不安だった中学校の入学式当日、僕はこんなふうに思っていました。クラス名簿を見ると、同じ小学校だった子に比べて、名前に聞き覚えがある子、保育園でいっしょだったけれど小学校が別の子もいました。しかし、入学式の日には緊張し、知らない子とは何も話せませんでした。

翌日、学校のチャイムが鳴ったとき、僕は中学校生活の第一歩を踏み出したような気がしました。そして自己紹介の時間があり、僕と同じ鉄道好きの子がいて、本当に良かったです。

班長、副班長決めもあり、班ごとに話し合いました。最初はだれもしゃべりませんでした。が、「どうする？」というだれかの一言でうちとけ合い、話がはずみうれしかったです。

今ではクラスメートに気軽に話しかけることができるようになり、どんどん友達ができ、毎日学校に行くことが楽しみにになりました。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年5月16日（月）掲載

命一つだから味わい深い人生 2年女子

「命が二つあったら」という授業を受けた。

授業中は、二つあった命が一つしかなくなってしまったら、あせってもう一つの命を大切にしている人がいると思っていた。だが、思い返してみると、やっぱり違う気がする。命が一つだからこそ、人生に喜びがあり、悲しみがあり、成長があり、後悔があるのだと思う。やり直せる人生があるなら、みんな何をやるかわからない。昨日、祖父がなくなった。一つの命が消えてしまった。祖父がいなかったら、私の母もこの世に生まれていない。つむいできてくれた命に感謝して、私は、今を強く生きていたいと思う。もし命が二つあったら、こんなことは考えもしないだろう。やり直しがきかないと思うからこそ人生は味わい深いのだと思う。命が一つしかない私たちにしかできないこと。それは、他人を思いやり私たちが未来を大切にすることではないのだろうか。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年6月7日（火）掲載

「明るい色」の言葉を使いたい 2年女子

「切り替えて」「まだまだ跳べるよ」。運動会の大縄跳びの練習の時、自分の言葉に驚いた。1年前のきつい言葉言う自分ではなく、温かい優しい言葉言う自分がいたからだ。

私は思ったことをストレートに言う癖があり、友達を傷つけてしまっていた。そういう自分が嫌いだった。きつい言葉を発した後は気持ちがブルーだった。違う言い方なら相手を傷つけずに済んだのにと悔やんだ。しかしあの時はオレンジ色の気持ちになった。

気付いた。言葉には、色があるということに。

明るい色の言葉をしゃべれば心も明るくなり、暗い色の言葉なら心も暗くなる。何より、明るい色の言葉が増えるほどクラスの団結力がアップしていく。

言葉は人と人をつなぎ、つながった人たちを正しい道へ連れて行ってくれる。正しい道は、言葉の色が決めてくれる。どの色になるかは私たちの口から出る言葉によって決められる。今年の運動会では、言葉の大切さを知ることができた。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成28年9月19日（月）掲載

歴史から人の生き方を学ぶ 3年男子

歴史というと年号や出来事の暗記ばかりで、果たして学ぶ意味なんてあるのだろうか。つい最近まで僕はそう思っていた。しかし、その考えは変わった。きっかけは、NHKの大河ドラマ「真田丸」を見るようになったことだ。興味を持って深く歴史を見つめると、陰謀やらロマンが渦巻いていることがわかった。

触発された僕は、坂本龍馬と織田信長の伝記を読んだ。気楽に読みたかったので、漫画本を選んだのだが、内容は濃く、面白くて読み始めたら止まらなかった。龍馬からは、反対されても自分の信念を最後まで貫き通す意志の強さを学んだ。信長からは、自分の利益だけ考えて物事を強引に進めていくと、最後の最後には人がついてこないことを学んだ。

人の生き方を探るという視点で歴史を学ぶと、これからの生活に生かせる知恵が見えてくる気がする。次はペリーの伝記を、漫画ではなく普通の本で読んでみたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年9月21日（水）掲載

歴史を学んで自分を見つめる 3年女子

歴史はどこからどこまでを指すのだろうか。私が考える歴史は人類が誕生するずっと前から、今生きている1秒前までだと考える。だとしたら、私は歴史を学ぶことに意味があると考えます。なぜなら、今この瞬間もどんどん時代は変わっていて、新しい歴史がつけられているからだ。

過去を振り返ることは昔の自分を知るチャンスになる。もちろん、自分の生まれる前も歴史なのだから、昔の出来事を知ることができる。歴史を知ることによって新しい自分や物事を見つけることができる。

もし、考え方が間違っても新しい何かにつながると考えるとおもしろい。昔が今、そして未来を変えていくのだろう。もしかしたら、歴史は身近にある「宝庫」なのかもしれない。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年9月28日（水）掲載

寺院で職場体験 2年男子

普通は、職場体験というとコンビニやファミレス、幼稚園などが思い当たります。でも僕は、お寺を選びました。仏教にも興味があったため、今回、お寺へ体験に行ったのです。

仕事の内容は、基本的には掃除です。初日は、墓地の掃除をしました。落ち葉を集め、線香の灰を掃除し、最後に花入れに入った雨水を全て抜きました。

二日目は、卒塔婆の裏書きを体験しました。字が下手でも、心を込めればよいと言われました。板に書くのはとても難しく苦労しました。僕たちが書いた卒塔婆は、水子さんたちのものでした。水子さんというのは、生まれてすぐに亡くなってしまったり、おなかの中にいたときに亡くなってしまったりした赤ちゃんのことです。みんなで、頑張って書きました。

最終日は、港区にある大きなお寺に行ってきました。午後は、初日のように墓地の掃除をしました。一日目とはまた別の気持ちで掃除をし、心を込めてやりました。本当によかったと思いました。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年9月29日（木）掲載

保育体験で学んだこと 2年女子

私が、保育園を職場体験先を選んだ理由は、小さい子が好きだからだ。

楽しいだろうなと思っていた。しかし、それは私の勝手なイメージで、本当はとても体力を使い、気も違う大変な職業だった。おもちゃの取り合いで、2人同時に泣いてしまったときは本当に困った。昼寝後におむつを替えなくてはいけなくて大忙しだった。勉強になったことも多い。年齢の異なる園児が交流することで、新しい言葉を覚え、コミュニケーション能力が高まるのだなと思った。自分ができないことを、先生にやってもらうのではなく、年が違う子にやってもらうことで、それぞれの成長につなげることも学んだ。将来、どんな仕事を選ぶかは分からないが、選択肢の中に保育士が入っている。好きなことが仕事になれば良いが、そうではないこともあるだろう。でも苦手なことも嫌がらずに体験すれば一歩前に進むことも学べた。保育園で職場体験ができてとても感謝している。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成28年10月3日（月）掲載

職場体験で働く喜びを知る 2年女子

職場体験学習で、ハンバーガーショップに行った。店の方はみんな優しく、不安ばかりの私に一つ一つ丁寧に教えてくださった。

初日はあいさつなど基本的なことを教わったが、とっさに声が出なかった。二日目と三日目は少し慣れたが、メニューの名前を忘れてたり、商品を届けるテーブルを間違えたり、失敗も多かった。でも「ありがとう」「ごちそうさま」と声をかけてくれるお客さんがいてとてもうれしかった。

私は今まで「働く」ということに対する認識があいまいで、深く考えもしなかった。しかし、3日間の職場体験を通して、「働く」ということは苦労や悔しい思いをすることもあるが、それを乗り越えたときの達成感を知ることができるのだとわかった。

今回は「中学生だから」と許されたこともあったと思う。この体験を生かし、自分に足りないことと向き合い、社会人になるまでにたくさんのことを学んでおきたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年10月5日（水）掲載

職場体験して親の苦労思う 2年男子

総合の授業で本駒込図書館に職場体験に行き、二つのことを感じました。

一つは、仕事量の多さと大変さ。本が膨大にありました。本を返却するときの仕事は3人がかりでやりましたが、多くの人がやってくるので、元の場所に戻しても返却の本が減る気配が全くありません。他に、破れたり壊れたりしている本を直す仕事もしました。図書館の人に聞くと、1日に約30冊も本が壊れてしまっているとのことで、僕はこれから、今以上に本を丁寧に扱おうと思いました。

二つ目はお金の大切さ。体験中はいつもの何倍も体力を使い、精神的にきつい思いをしました。毎日仕事をしている父や母は常にこれくらい頑張っていて、僕らが生活するお金が生まれるのだと感じました。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成28年10月13日（木）掲載

移動教室で学んだ友情と協力 1年女子

私は、ハヶ岳の移動教室に行って学んだことがいくつかあります。その一つが友情と協力の心です。

山登りの時のことです。私は体力があるわけではなく、運動神経も皆無に等しいのです。だから、登って1時間もたないうちに疲れてしまいました。だけど、私は登り切りました。今考えると、一緒に登ったみんなのおかげだと思います。「しんどい」と一緒にグチり合ったり、「がんばって」と友達と励まし支え合ったりしました。だから、私のつらい体は、がんばろうと思い、山を登り切れたのだと思います。

ハヶ岳の生活全体でも同じことを感じました。ウォークラリーの時も、食事の準備の時も、ナイトハイクの時も、参加者全員で協力したからこそ、楽しく過ごせたと思います。

移動教室での友情は見せかけやきれいごとではありません。私は心底、友情と協力の大切さを感じました。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年10月19日（水）掲載

園児に学んだ働く意義 2年女子

授業での職場体験の前に、風邪をひいてしまったため、たった1日だけの体験になってしまったけれど、近くの幼稚園に行き、たくさんのことを学んだ。

園児が登園し、全員そろった。クラスになじむのはなかなか難しいと思っていたら、女の子が話しかけてくれた。私はこれだけですごくうれしくて、やっと一歩踏み出すことができたと思った。その子としばらく遊んでいると、どんどん他の子が集まってきて、気付いたら男女関係なくたくさんの子がいた。最初の女の子のおかげで、たくさんの子と仲良くなることができた。

お弁当の時間は、その子と隣どうして食べた。そのとき前にいた男の子が私を指さして、「嫌い」と言った。ああ、やっぱりこういう子もいるよな、と思い、適当に笑ってごまかした。でも、お弁当のあとにはその男の子とも一緒に遊んだ。

帰りの時間になり、親の迎えを待った。迎えが来た子から帰り始める。その様子を、私はただ立って見ていた。すると最初の女の子が、お母さんと一緒に私のところに来た。「ばいばい。ありがとう」笑顔で御礼を言ってきてくれた。お礼を言うのはこっちなのに。こちらこそって、笑顔で見送ると、「嫌い」と言っていた男の子が来た。「また来てね。ばいばい」お弁当のときは嫌いって言っていたのに。

充実すぎて、あっという間の1日だった。働くって、人のためだけじゃなく、自分のためでもあるんだなって思った。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年10月19日（水）掲載

演劇から学ぶ 仲間信じる力 2年女子

演劇「チャージ」は私に教えてくれた。人を信じ、支え合うということは「人を認める」ことであると。

学校の演劇鑑賞教室で劇団「銅鑼（どら）」の劇を見た。個々の多様な考えを持つ人々が意見を出し合い、ぶつかり合う濃い人間ドラマである。家族を守るため、生きていくため、働く理由はそれぞれだが、何より仕事と信頼できる仲間に誇りを持ち続ける登場人物たちの姿に心動かされた。

自分にも自信を持てるくらい仲間を信じ、高め合っていきたい。私は今、自分のクラスが好きだ。「チャージ」を見て、仲間を信じる思いがさらに磨かれた気がする。これからもっとみんなと認め合い、切磋琢磨し、補い合っていこう。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成28年10月31日（月）掲載

パラリンピアンンの底力体感 1年女子

車いすテニスでアトランタ、シドニー、アテネ、北京のパラリンピック4大会に出場した大前千代子さんが先日、私が通う中学校で実技披露と講演をしてくださった。

テニス部員の私は、大前さんのラリーの相手をさせていただいたが、そのプレーのすごさに驚いた。車いすというハンディがありながら、びしりと鋭いボールを返す姿に圧倒された。若々しくて、とても60歳とは思えなかった。

大前さんは、車いすテニスを始める前はアーチェリーや陸上競技でも活躍し、パラリンピックで金メダルも獲得されている。講演では「障害者差別をはね返そうと、その一心で頑張り続けた。何事にも前向きに取り組み、それが自信につながり、自信が自分をかえてくれた」とおっしゃっていた。テニス部員には「最初から上手な人はいない」と、努力の大切さを説かれた。私もテニスに限らず、どんなことにも努力を重ねたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年11月2日（水）掲載

車いすテニス 難しさを実感 1年女子

「夢・未来」プロジェクトの授業で、パラリンピアンンの車いすテニス、大前千代子さんが学校に来てくださいました。テニス部の人が大前さんとテニスをしたり、競技用車いすに乗っているのを見て、車いすテニスの選手は本当にすごいと思いました。足が使えない分、腕で車いすを動かし、ラケットで打ち合うことはとても難しいと思います。

また、大前さんの歩んできた人生について知ることができました。自分の課題と向き合って努力する大前さんに強く心打たれました。病気で動かなくなった足とともに生きていくことでついた精神力は、努力して乗り越えたものです。

大前さんの願いどおり、4年後にはパラリンピックにも興味をもつ人が増えるといいなと思います。

※ 東京新聞「若者の声」 平成28年11月16日（水）掲載

クラスが一丸 最高の合唱に 1年女子

初めての合唱コンクールがあった。それぞれのクラスの合唱を聞き、それぞれの展示を見る。合唱も展示も、とても素晴らしくワクワクした。

自分たちの出番になるととても緊張した。なにせ1学期から歌の練習をしていたのだ。ついに本番となるとやはり緊張するものだ。合唱曲「心の瞳」の練習を始めてすぐは、アルトなのにソプラノしか覚えられなくて、いいかげんに歌ったこともあった。アルトの人たちと協力して練習したことで、ソプラノにつられずに歌うことができた。

そして、今までの成果を出し切り、みごと金賞をとることができた。

金賞をとれたのはもちろん、何よりクラスの人たちと協力できたことが本当にうれしかった。とても思い出に残る合唱だった。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成29年2月7日（火）掲載

相手の気持ちを思いやろう 2年女子

先日読んだ新聞に、電車で席を譲る側も譲られる側も、互いの気持ちを思いやろうという記事があった。そこで私は、相手への配慮や気遣いについて考えてみた。以前、電車に乗っていたとき、優先席の前にキャリーバッグをもった妊婦さんが立っていた。しかし、優先席に座っていた方は、スマホに集中していて、全く譲る気配がなかった。私の学校の先生は、自分が妊娠していたとき、立っているのもつらいくらいだったとおっしゃっていた。だからそれを見て、なぜ譲らないのかと思った。しかし、そういった気持ちも、自分で体験したり、人に話を聞いたりしたことがないと、思いつかないのかもしれない。人の気持ちを、理解するのは難しい。最近では、SNSなどで、小さな誤解からトラブルにつながることも増えているそうだ。私たちは今一度、思いやりをもった行動を心がけるべきではないだろうか。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年2月15日（水）掲載

歩きスマホの危険に気付く 2年女子

新聞の投稿欄で、歩きスマホを野放しにしてはいけないという意見を読んだことがある。私も歩きスマホの危なさを実感することがあったので、やってはいけないと思う。

以前、私が歩きスマホをしながら道路を横断していたとき、歩くスピードが遅くなり、知らない間に信号が赤に変わっていたことがあった。私は通行を妨げ、とても迷惑をかけていたことに後から気づいた。

今はスマホ依存の人が多く、街を歩く人たちはほとんどがスマホの画面を見ながら下を向いて歩いている。事故が起きてからでないと、その危険に気づかないのだろうか。

歩きスマホは本当に危険だ。自分の未来のためにも、気をつけようと改めて感じた。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年2月15日（水）掲載

伝統文化体験 面白さに開眼 1年女子

校外学習で浅草を訪れ、伝統文化の面白さや素晴らしさに気づいた。最も印象深いのが寄席だ。

落語は江戸時代から続く文化だが、校外学習に行くまでは興味がなく、つまらない話を長々とするイメージしかなかった。しかし、本物の落語を見ると、まったく飽きない面白さがあった。動きの一つ一つに工夫がされていて、とてもひかれた。登場人物の年齢や立場によって上や下を向いて話したり、声色を変えたりして一人二役を演じていた。

また、日常的な生活が題材になり、話していることが目に浮かぶようだった。

これからも東京ならではの伝統文化に親しみ、その良さを伝えていきたいと思う。機会があれば、また寄席を見に行きたい。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成29年2月20日（月）掲載

保護主義の広がりが心配だ 3年男子

最近、米国やヨーロッパで保護主義的な動きが広まり、グローバル化の流れが行き詰ったように感じられ、僕は心配だ。

人と同じように旬にも自己中心的な考えを抱きがちだ。しかし、意見を主張するのはいいことだが、それを押しつけ過ぎてはいけないと思う。押しつけ合って衝突した顕著な例が、2つの世界大戦だろう。

何事も自国のことを最優先に考えようとする流れは、世界を大戦前と同じような状況に近づけている感じがひしひしとする。だが、僕たちは過ちから学んで、どこかで立ち止まり、冷静になる必要がある。

僕たちは中国製の服を着て、ノルウェー産のサケを食べ、米ハリウッドで作られた映画を見ている。人が助け合って生きていくように、国も一国だけでは成り立たない。

僕は、国同士が協力関係を保ちながら平和を維持する世界で、自分の将来の夢をかなえていきたい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年2月22日（水）掲載

美しい日本語 使えるように 2年女子

私はあるラジオ番組を毎日のように聞いている。リスナーの悩みについて助言したり、エールを送ったりと、番組なりの答えを出してくれる。その一つ一つが私の心に残ることに気付いた。美しい言葉が入っているからだと思う。きっと意識して一言一言話し、心に響くようにしているのだ。

これに気が付いてから、美しい日本語を使うのは大切なことだと感じるようになった。日本語は一つの意味に対してたくさんの言葉がある。その中から、美しい言葉を選んで使うことは美しい日本語を残していくためにも、人に伝わりやすくするためにも必要だ。私はこの番組をこれからも聞き、あたりまえのように美しい言葉を使いたい。

※ 毎日新聞「みんなの声」 平成29年2月28日（火）掲載

次は失敗恐れず挑戦したい 2年女子

挑戦することは大切なことだ。なぜなら、挑戦することでそのことができるようになり、成長することができるからだ。

私にはこんな経験がある。学校で委員会の所属を決める時、私は入りたい委員会があった。その委員会には各クラスで1人は入れるが人気が高く、私の他に入りたい人が2人いた。そのためスピーチで決めることになった。私はその時、自信がなくて諦め、スピーチに参加しなかった。今思うとなぜ諦めてしまったのだろうか。どこに選ばれないという根拠があったのだろうか。とても後悔している。でも私はその経験があったから、挑戦することの大切さを知ることができた。挑戦したから必ず成功するとは限らない。しかし、失敗から学べることもあると思う。挑戦して失敗したら、何回でも挑戦すればいい。何事も挑戦しないと始まらない。だから私は失敗を恐れずに挑戦したい。もし失敗しても、その挑戦で学んだことは必ず私の役に立つと思うから。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年3月2日（木）掲載

免許返納義務 望む理由 2年男子

僕は高齢者の運転免許証の返納を義務化すべきだと思う。僕の祖母は一昨年秋、高齢者が運転する車にひかれてこの世を去った。事故当時は晴れで、現場は見通しの良い直線道路だった。信号機のない横断歩道上の事故だったが、ずーとまっすぐの道なので、運転席から、横断歩道を渡る祖母の姿はしっかりと見えていたはずだ。

それにも関わらず、祖母はひかれて亡くなった。祖母はまだまだ元気だった。事故の前に、夏休みの帰省で祖母の家に行ったとき、「遠くんが結婚するまでは生きていたいわね」と言っていた。しかし、その言葉は実現することなく、何の前触れもなく突然なくなってしまった。僕はこんな思いをする人が増えてはいけないと思う。

この事故は、ドライバーが高齢になったことで、体が衰えていたことが主な原因だったという。最近では、高齢者が加害者になった自動車の事故が増えているように思う。報道される事故原因や、加害者になってしまった方の言葉は、「アクセルとブレーキを踏み間違えた」「事故のときの記憶がない」などが多く、僕は嫌な気持ちになってしまう。

祖母の事故も「よくある原因」で起きたものだ。体の衰えは誰にでも起きる自然なことなのだから、何らかの対応が必要ではないだろうか。このような死亡事故が何度も起こる前に、また、自分たちが加害者になってしまう前に、高齢者の運転免許証の返納を義務化しなければならないと思う。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年3月9日（木）掲載

たばこ吸う人 マナー守って 1年女子

毎日、道に落ちているたばこの吸い殻を目にする。随分前から、ポイ捨て禁止運動や、歩行喫煙禁止運動があり人々の意識は高まっている。罰金を払わせる地域もある。一方、隠れてポイ捨てや歩きたばこをしている人もいる。

なぜたばこを吸うのか、よく耳にする理由は「気分がよくなるから」「やめられない」などだ。私の親戚もたばこを吸う人が多く、家庭環境的に習慣付いている。「習慣を直そう」という意識をもち、たばこの害を知ることが大事だ。すると自然に喫煙者は減っていくのではないか。

たばこは周りの人にも影響する。喫煙者は非喫煙者への配慮が必要だ。喫煙者が減り、マナーを破る人がゼロになることが、私の一番の望みだ。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年3月16日（木）掲載

友とつかんだ 志望校の合格 3年男子

高校受験。苦戦を強いられながらも僕はやっと「志望校合格」の結果を手に入れた。だがその瞬間は喜び半分、悲しみ半分だった。

いつもそばで支えてくれた友人がいる。彼の試験日は僕より早かった。試験前「合格して自分の受験を成功させる」と言った。合格するように祈っていたが結果は良いものではなかった。僕は彼の方まで頑張らなければと思った。励ますにはそれしかないと思ったのだ。強い気持ちで試験に臨み結果をいち早く伝えた。誰よりも喜んでくれた。

「受験は団体戦」という言葉がある。自分の努力とそれを支える仲間があってこそ、合格の感動がひとしおなのだと思う。

友人はその後、志望校の合格をつかみ取った。自分のことのようにうれしかった。

※ 朝日新聞「若い世代」 平成29年3月17日（金）掲載

また落語を聞きに行きたい 1年女子

私は、落語が好きだ。なぜなら、聞いている人を笑顔にすることができるからである。

テレビ番組の「笑点」を見ていて、いつか生で落語を聞いてみたいと、ずっと思っていた。学校の校外学習で浅草演芸ホールに行くことになり、楽しみにしていた。

2時間ほどの時間は、あっという間に過ぎた。落語家の一人一人に個性があり、一つ一つの動作に工夫があった。扇子一つでいろいろなものを表現したり、顔の向きで人間関係を表したりできるのがすごかった。落語だけではなく漫才や講談も見ることができて、すごく楽しかった。

演芸ホールでの周りの人の楽しそうな笑い声は、今でも心に響いている。小さな動きでも思いのこもった話術を、これからも体験したいと思っている。

※ 毎日新聞「みんなの声」 平成29年3月17日（金）掲載

日本の友達を増やしたい 1年女子

中国から日本に来て、もうすぐ10カ月になります。時間が過ぎるのは、とても速いです。

日本に来た当初は、日本語がまったく分かりませんでした。日本の友達はすぐにはできませんでした。授業のときは、何も分からなくてただ眠かったです。少したって日本語がちょっと分かるようになったら、一人、二人と友達が増えました。一緒に遊んだり、勉強をしたり、歌を歌ったりしました。一番楽しかったことは、八ヶ岳に登ったことです。友達と一緒に山に登り感動しました。お弁当を食べたり、おしゃべりをしたりして楽しかったです。今は日本語がだいぶ分かるようになりました。友達も増えました。困ったときに友達に聞くと、親切に教えてもらえます。不安が少なくなり、とても感謝しています。今は、とても学校が楽しいです。これからも日本語の勉強をがんばって、日本について理解したいです。

※ 産経新聞「ひこばえ倶楽部」 平成29年3月20日（月）掲載

お互いの長所を探し合おう 1年女子

道徳の授業で、いじめについてクラスメートたちと考えた。そこで私は、いじめはたくさんケースがあることを知った。単なる風評被害でいじめにあっている人もいるという。あってはならないことだ。

私の周りでもいじめが起きているのかもしれない。決して人ごとのように考えてはいけないと思った。

私は、一人一人の個性と考えていることが違うから、いじめが起きてしまうと考えている。だからといって、人をいじめて良いことは何もない。お互いを見つめ直して、相手の良いところを見つけて少しでも好きになれるよう心がければ、いじめは起きないと思う。「嫌い」が「苦手」に変わる小さな変化だけでも、大きな進歩だと思う。

いじめたりいじめられたり、私は経験がないので、その立場にいる人の気持ちは正直、よくわからない。でも、好きな人とも苦手な人とも、常にリラックスした関係でいられるよう努力したい。

※ 東京新聞「若者の声」 平成29年3月23日（木）掲載

笑顔で走れる 自転車の道を 1年女子

私は毎日、自転車に乗っている。あるとき、歩道を走っていたら、前に音楽を聞きながら歩いている人がいた。「危ない」と思ったが、イヤホンをしていた人は私に気付かず、自分が車道に出てしまったことがあった。

自転車は、車道を走るべきなのか、歩道を走ってもいいものなのか、私はいつも考えている。「車」という字が入っているから車道を走るのが基本なのだろうが、車道は駐車している車を避けて走らねばならず、歩道を走るより危険なのだ。

自転車が安心して走れる道を造ってほしい。そうすれば交通事故を減らすことができると思う。私が望んでいるのは、歩く人、自転車をこぐ人が笑顔で通れる道ができることだ。

※ 毎日新聞「みんなの広場」 平成29年3月24日（金）掲載

もろくて弱い人間の心 2年女子

先生が生徒に「菌」をつけて呼んだことについての本欄『一言の重み』考えてほしい（昨年12月18日）に共感した。

私は小学生のとき、ひどいあだ名をつけられたことがある。我慢していたが、ある日怒りを抑えきれなくなって爆発し怒鳴ってしまった。その日から言われることはなくなったが、友達が離れていってしまったように感じた。中学生になりまた同じようなあだ名で呼ばれ始めた。「今度は怒らないように」と思って我慢していたが、心がつらく苦しかった。勇気を出して先生に言った。先生はまじめに聞いてくれた。家に帰ると母から「つらいことがあったら言うのよ」と言われた。先生から聞いたそうさ。私はその日から言いたいことは言うようになった。怒鳴るのではなく優しくだ。

人間の心はもろくて弱いものだ。軽く言ったつもりでも言われた方は重く受け止めてしまう。たった一言で人間の心は崩れてしまうのだと、心に刻んでおいてほしい。